

平成 28 年度

市町村公営企業決算概況

千葉県総務部市町村課

目 次

第 1 編 平成28年度地方公営企業決算の概要

第1章	総論	
第1節	事業数	1
第2節	業務の状況	4
第3節	職員数	4
第4節	決算規模	6
第5節	全体の経営状況	7
第6節	料金収入	10
第7節	企業債	11
第8節	他会計繰入金	14
第9節	建設投資及びその財源	16
第10節	法適用企業の経営状況	19
第11節	法非適用企業の経営状況	29
第12節	経営健全化等の状況	33
第13節	まとめ	33
第2章	事業別状況	
第1節	水道事業（上水道事業及び簡易水道事業）	35
第2節	ガス事業	53
第3節	病院事業	62
第4節	下水道事業	80
第5節	市場事業	105
第6節	宅地造成事業	112
第7節	駐車場整備事業	117
第8節	介護サービス事業	121

第 2 編 統計資料

第1章	全事業総括	
第1節	地方公営企業決算の概要	133
第2節	地方公営企業の事業数	135
第3節	職員数の状況	138
第4節	決算規模	139
第5節	建設投資額及びその財源内訳	140
第6節	法適用企業の決算状況	141
第7節	経営分析（法適用企業）	152
第8節	法非適用企業の決算状況	157
第9節	企業債の状況	160
第10節	繰入金及び繰出金の状況	166
第11節	資金不足比率の状況（平成28年度）	168

目 次

第2章	事業別決算カード	
第1節	法適用企業	
	上水道事業	171
	簡易水道事業	217
	ガス事業	219
	病院事業	225
	市場事業	247
	観光施設事業（その他観光施設）	248
	介護サービス事業	249
	公共下水道事業	251
	特定環境保全公共下水道事業	257
第2節	法非適用企業	
	電気事業	261
	市場事業	266
	と畜場事業	273
	観光施設事業（休養宿泊）	275
	観光施設事業（その他観光施設）	276
	宅地造成事業（その他造成）	278
	駐車場整備事業	283
	介護サービス事業	304
	公共下水道事業	332
	特定公共下水道事業	360
	特定環境保全公共下水道事業	361
	農業集落排水事業	368
	特定地域生活排水処理事業	388
第3編	参考資料	
第1章	主要企業の料金等の状況	
第1節	水道事業	394
第2節	下水道事業	396
第2章	市町村別地方公営企業の状況	
	市町村別地方公営企業の状況	400
第3章	地方独立行政法人の経営状況	
	公営企業型地方独立行政法人（病院事業）	409

表の見方

第1 調査対象事業及び期間

平成28年4月1日から平成29年3月31日までの間において、地方公営企業法（昭和27年法律第292号）を適用している事業（競馬、競輪、競艇等の収益事業、農業共済事業、交通災害共済事業は除く。）及び地方公営企業法を適用していない事業（地方財政法施行令第46条に掲げる事業並びに観光用有料道路以外の有料道路事業、観光地駐車場以外の駐車場整備事業、介護サービス事業）について、平成28年度の決算及び業務状況等を調査したものである。

第2 集計事業の種類及び事業数

1 法適用企業（地方公営企業法の規定の全部又は一部を適用している事業）

集計事業の種類及び事業数は、水道事業（簡易水道2事業を含む。）46、ガス事業6、病院事業19（病院数22）、下水道事業10（公共下水道6、特定環境保全公共下水道4）、市場事業1（市場数1）、観光施設事業1（その他観光施設1・施設数1）、介護サービス事業1、合計84である。

2 法非適用企業（地方公営企業法の規定を適用していない事業）

集計事業の種類及び事業数は、電気事業1（施設数5）、下水道事業58（公共下水道28、特定公共下水道1、特定環境保全公共下水道7、農業集落排水施設20、特定地域生活排水処理施設2）、市場事業6（市場数7）、と畜場事業2、観光施設事業3（休養宿泊施設1・施設数1、その他観光施設2・施設数2）、宅地造成事業5（その他宅地造成5）、駐車場整備事業11（駐車場数22）、介護サービス事業15、合計101である。

第3 施設及び業務概要

平成29年3月31日現在のものであり、平成28年度における実績である。

第4 集計の方法及び用語の定義

1 法適用企業

- (1) 水道事業とある場合には、簡易水道事業を含めている。
- (2) 各項目の数値は表示単位未満を四捨五入している。したがって、その内訳を合計した数値は合計欄の数値と一致しない場合がある。

損益計算書は税抜数値で作成されるため、本文第1章第10節法適用企業の経営状況1損益収支は税抜数値により記述されている。

しかし、同章第4節決算規模における法適用企業の総費用は税込数値で計上されているほか、同章第9節建設投資及びその財源、同章第10節法適用企業の経営状況5資本収支は税込数値により記述されている。

(3) 財務諸表

ア 項目区分は、地方公営企業法施行規則に定める勘定科目に準拠した。

イ 全事業合計は、各事業の共通項目について集計したものであるが、損益計算書中、ガス事業においては、「製品売上」を「営業収益」に、「売上原価」・「供給販売費及び一般管理費」を「営業費用」としてそれぞれ集計した。(ただし、ガス事業の費用構成は製造原価による。)

ウ 貸借対照表は、次の区分により集計を行った。

(ア)「不良債務」とは、流動負債（建設改良費等の財源に充てるための企業債等を除く。）の額が流動資産の額（翌年度へ繰り越される支出の財源充当額を除く。）を超える額である。

(イ)「実質資金不足額」とは、不良債務から当該決算期日における一時借入金又は未払金で公営企業の建設又は改良に要する経費に係るもののうち、その支払に充てるため翌年度において地方債を起こすこととしているものの額を控除した額である。

エ 資本収支に関する調は、次の区分により集計を行った。

(ア)「翌年度へ繰り越される支出の財源充当額」は、当該年度の資本的収入額のうち、当該年度において事業が完了しない等の理由により当該収入額を充当すべき支出が、翌年度へ繰り越された場合の翌年度支出額に対する充当額である。

(イ)「前年度同意等債で今年度収入分」は、前年度同意等債で今年度収入したもののうち、前年度において支出予算執行済みとした建設改良費で未払いとしたものの財源に充てた企業債の額である。

(ウ)「資本的収入額が資本的支出額に不足する額」の算出は、資本的収入額から「翌年度へ繰り越される支出の財源充当額」及び「前年度同意等債で今年度収入分」を控除した額が資本的支出額に不足する場合の額のみを集計したものである。

(エ)「補填財源」とは、(ウ)の「資本的収入額が資本的支出額に不足する額」を補填するため充てた過年度及び当年度分損益勘定留保資金、繰越利益剰余金処分量、当年度利益剰余金処分量、繰越工事資金等の合計額である。

(4) 経営分析

ア 各比率の算出方法及び計算の際用いた用語の区分は、次のとおりである。

※ 平成 26 年度決算から地方公営企業会計基準の見直しにより算出方法を変更している。よって、平成 25 年度の比率については、変更前の算出方法により算出した比率となっている。

$$(ア) \text{ 固定資産構成比率 (\%)} = \frac{\text{固定資産}}{\text{固定資産} + \text{流動資産} + \text{繰延資産}} \times 100$$

$$(イ) \text{ 固定負債構成比率 (\%)} = \frac{\text{固定負債}}{\text{負債資本合計}} \times 100$$

(ウ) 自己資本構成比率 (%)	=	$\frac{\text{資本金} + \text{剰余金} + \text{評価差額等} + \text{繰延収益}}{\text{負債資本合計}}$	×100
(エ) 固定資産対 長期資本比率 (%)	=	$\frac{\text{固定資産}}{\text{資本金} + \text{剰余金} + \text{評価差額等} + \text{固定負債} + \text{繰延収益}}$	×100
(オ) 固定比率 (%)	=	$\frac{\text{固定資産}}{\text{資本金} + \text{剰余金} + \text{評価差額等} + \text{繰延収益}}$	×100
(カ) 流動比率 (%)	=	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}}$	×100
(キ) 酸性試験比率 (%) (当座比率)	=	$\frac{\text{現金預金} + (\text{未収金} - \text{貸倒引当金})}{\text{流動負債}}$	×100
(ク) 現金比率 (%)	=	$\frac{\text{現金預金}}{\text{流動負債}}$	×100
(ケ) 自己資本回転率 (回)	=	$\frac{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}}{\frac{\text{期首自己資本} + \text{期末自己資本}}{2}}$	
		(注) 自己資本 = 資本金 + 剰余金 + 評価差額等 + 繰延収益	
(コ) 固定資産回転率 (回)	=	$\frac{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}}{\frac{\text{期首固定資産} + \text{期末固定資産}}{2}}$	
(サ) 減価償却率 (%)	=	$\frac{\text{当年度減価償却額}}{\text{有形固定資産} + \text{無形固定資産} - \text{土地} - \text{建設仮勘定} + \text{当年度減価償却額}}$	×100
(シ) 流動資産回転率 (回)	=	$\frac{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}}{\frac{\text{期首流動資産} + \text{期末流動資産}}{2}}$	
(ス) 未収金回転率 (回)	=	$\frac{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}}{\frac{\text{期首未収金} + \text{期末未収金}}{2}}$	
(セ) 総収支比率 (%)	=	$\frac{\text{総収益}}{\text{総費用}}$	×100
(ソ) 経常収支比率 (%)	=	$\frac{\text{経常収益}}{\text{経常費用}}$	×100
(タ) 営業収支比率 (%)	=	$\frac{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}}{\text{営業費用} - \text{受託工事費用}}$	×100
(チ) 利子負担率 (%)	=	$\frac{\text{支払利息} + \text{企業債取扱諸費}}{\text{企業債} + \text{長期借入金} + \text{一時借入金} + \text{リース債務}}$	×100
(ツ) 企業債元金償還金対 減価償却額比率 (%)	=	$\frac{\text{建設改良のための企業債元金償還金}}{\text{当年度減価償却費} - \text{長期前受金戻入}}$	×100

(テ) 企業債元金償還金対
料金収入比率 (%) = $\frac{\text{建設改良のための企業債元金償還金}}{\text{料金収入}} \times 100$

(ト) 企業債利息対
料金収入比率 (%) = $\frac{\text{企業債利息}}{\text{料金収入}} \times 100$

(ナ) 企業債元利償還金対
料金収入比率 (%) = $\frac{\text{建設改良のための企業債元利償還金}}{\text{料金収入}} \times 100$

(ニ) 職員給与費対
料金収入比率 (%) = $\frac{\text{職員給与費 (特別損失のうちの職員給与費を含む)}}{\text{料金収入}} \times 100$

(ヌ) 職員 1 人当たり
営業収益 (千円) = $\frac{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}}{\text{損益勘定所属職員数}} \times 100$

(ネ) 経常損失比率 (%) = $\frac{\text{経常損失}}{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}} \times 100$

(ノ) 累積欠損金比率 (%) = $\frac{\text{累積欠損金}}{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}} \times 100$

(ハ) 不良債務比率 (%) =

$$\frac{\left[\begin{array}{l} \text{流動} \quad \text{建設改良費等の財} \quad \text{PFI法に基づく事業} \\ \text{負債} \quad \text{源に充てた企業債} \quad \text{に係る建設事業費等} \\ \quad \quad \quad \cdot \text{長期借入金} \quad \quad \quad \text{のリース債務} \end{array} \right] - \left[\begin{array}{l} \text{流動} \quad \text{翌年度} \\ \text{資産} \quad \text{繰越財源} \end{array} \right]}{\text{営業収益} - \text{受託工事収益}} \times 100$$

(ヒ) 有形固定資産
減価償却率 (%) = $\frac{\text{減価償却累計額}}{\text{償却資産}} \times 100$

イ 法適用企業の料金単価と供給原価の算出方法は、次のとおりである。

(ア) 料金単価

a 水道 : $\frac{\text{給水収益}}{\text{年間総有収水量}}$

b ガス : $\frac{\text{料金収入}}{\text{販売量}}$

c 下水道 : $\frac{\text{料金収入}}{\text{有収水量}}$

(イ) 供給原価

a 水道 : $\frac{\text{費用合計} - \text{長期前受金戻入}}{\text{年間総有収水量}}$

(注) 費用合計 = 経常費用 - (受託工事費 + 附帯工事費 + 材料及び不用品売却原価)

b ガス : $\frac{\text{費用合計} - \text{長期前受金戻入}}{\text{販売量}}$

c 下水道 : $\frac{\text{汚水処理費 (公費負担分を除く)}}{\text{有収水量}}$

(汚水処理原価)

ウ 上記のほか、主要事業の各比率の算出方法は、次のとおりである。

(ア) 水道事業

a 負荷率 (%)	=	$\frac{1 \text{ 日平均配水量}}{1 \text{ 日最大配水量}}$	×100
b 施設利用率 (%)	=	$\frac{1 \text{ 日平均配水量}}{1 \text{ 日配水能力}}$	×100
c 最大稼働率 (%)	=	$\frac{1 \text{ 日最大配水量}}{1 \text{ 日配水能力}}$	×100
d 配水管使用効率 (1 m 当たり m ³)	=	$\frac{\text{年間総配水量}}{\text{導送配水管延長}}$	
e 固定資産使用効率 (1 万円当たり m ³)	=	$\frac{\text{年間総配水量}}{\text{有形固定資産}}$	
f 職員 1 人当たり給水人口 (人)	=	$\frac{\text{現在給水人口}}{\text{損益勘定所属職員数}}$	
g 職員 1 人当たり有収水量 (m ³)	=	$\frac{\text{年間総有収水量}}{\text{損益勘定所属職員数}}$	
h 有収率 (%)	=	$\frac{\text{年間総有収水量}}{\text{年間総配水量}}$	×100
i 企業債残高対給水収益比率 (%)	=	$\frac{\text{企業債現在高}}{\text{給水収益}}$	×100
j 料金回収率 (%)	=	$\frac{\text{給水収益}}{\text{費用合計一長期前受金戻入}}$	×100

(イ) ガス事業

a 導管使用効率 (1 m 当たり 1000MJ)	=	$\frac{\text{販売量}}{\text{導管延長}}$	
b 固定資産使用効率 (1 万円当たり 1000MJ)	=	$\frac{\text{販売量}}{\text{有形固定資産}}$	
c 職員 1 人当たり {供給戸数 (戸) ・販売量 (1000MJ) }	=	$\frac{\text{現在供給戸数} \cdot \text{販売量}}{\text{損益勘定所属職員数}}$	

(ウ) 病院事業

a 病床利用率 (%)	=	$\frac{\text{年延入院患者数}}{\text{年延病床数}}$	×100
b 稼働病床利用率 (%)	=	$\frac{\text{年延入院患者数}}{\text{年延稼働病床数}}$	×100
c 1 日平均入院患者数 (人)	=	$\frac{\text{年延入院患者数}}{\text{入院診療日数}}$	

d	1日平均外来患者数(人)	=	$\frac{\text{年延外来患者数}}{\text{外来診療日数}}$	
e	外来入院患者比率(%)	=	$\frac{\text{年延外来患者数}}{\text{年延入院患者数}}$	×100
f	職員1人当たり診療収入(千円)	=	$\frac{\text{入院収益} + \text{外来収益}}{\text{損益勘定所属職員数}}$	
g	医師1人1日当たり {入院(外来)患者数(人)・診療収入(千円)}	=	$\frac{\text{年延入院(外来)患者数} \cdot \text{入院収益} + \text{外来収益}}{\text{年延医師数}}$	
h	患者1人1日当たり入院診療収入(円)	=	$\frac{\text{入院収益}}{\text{年延入院患者数}}$	
i	患者1人1日当たり外来診療収入(円)	=	$\frac{\text{外来収益}}{\text{年延外来患者数}}$	
j	総患者1人1日当たり収益費用(円)	=	$\frac{\text{総収益(繰入金除く)} \cdot \text{薬品収入} \cdot \text{総費用} \cdot \text{給与費} \cdot \text{薬品費} \cdot \text{純利益}}{\text{年延入院患者数} + \text{年延外来患者数}}$	
k	入院患者1人1日当たり給食材料費(円)	=	$\frac{\text{給食材料費(患者用)}}{\text{年延入院患者数}}$	
l	稼働病床1床1日当たり収益費用(円)	=	$\frac{\text{医業収益} \cdot \text{医業費用}}{\text{年延稼働病床数(感染症病床除く)}}$	
m	病床100床当たり職員数(人)	=	$\frac{\text{年度末職員数}}{\text{年度末病床数}}$	×100
n	薬品使用効率(%)	=	$\frac{\text{薬品収入}}{\text{医療材料費のうち薬品費}}$	×100

(エ) 下水道事業(法非適用企業共通)

a	水洗化率(%)	=	$\frac{\text{現在水洗便所設置済人口}}{\text{現在処理区域内人口}}$	×100
b	合流管比率	=	$\frac{\text{合流管布設延長}}{\text{下水管布設延長}}$	
c	有収率(%)	=	$\frac{\text{年間有収水量}}{\text{汚水処理水量}}$	×100
d	施設利用率(%)	=	$\frac{\text{晴天時一日平均処理水量}}{\text{晴天時一日処理能力}}$	×100
e	受益者負担金負担率(%)	=	$\frac{\text{受益者負担金実収入額}}{\text{総事業費} - \text{特定財源}}$	×100
f	経費回収率(%)	=	$\frac{\text{使用料収入}}{\text{汚水処理費用(公費負担分を除く)}}$	×100

(5) 職種別給与に関する調

- ア 平成 29 年 3 月 31 日現在である。
- イ 「年間延職員数」とは、年度中の毎月末において在職した職員数の合計である。
- ウ 「平均月収額」は、年間支払額を年間延職員数で除した額であり、期末勤勉手当等を含むものである。
- エ 「基本給」は、給料、扶養手当及び地域手当の合算額である。
- オ 「平均年齢」は、年度末職員の延職員年齢数を年度末職員数で除したものである。

2 法非適用企業

- (1) 各項目の数値は、表示単位未満を四捨五入したものである。したがって、その内訳を合算した数値は合計欄の数値と一致しない場合がある。

また、各項目の数値は税込数値である。

- (2) 決算の状況

ア 「歳入歳出決算に関する調」については、法適用企業に準じて作成した。

イ 赤字比率は $\frac{\text{実質赤字額}}{\text{営業収益}-\text{受託工事収益}} \times 100$ で算出した。

ウ 収益的収支比率は $\frac{\text{総収益}}{\text{総費用}+\text{地方債償還金}} \times 100$ で算出した。

